東京天台

平成二十三年
秋彼岸号

発行所
天台宗東京教区
板倉慈慎
〒107-0062 東京都港区南青山1-3-22
TEL.03-5785-3481

http://www.tendaitokyo.jp/

生かされている命

～東日本大震災を乗り越えて行く～

平成二十三年三月十一日に発生した東日本大震災は、東北地方を中心に日本列島に甚大な被害をもたらしただけでなく、私たちがこれまで築きあげた社会の危うさをさらけだしました。被災した私たちが震災後の社会で暮らしていくためには、将来起こりうる大地震への備え、原子力発電に依存した経済活動の見直しなど、生活環境の変革が必要とされていますが、それと同時に生活意識の変革も求められているように思えてなりません。では、私たちは今後どのような意識をもって暮らしていくべきなのでしょうか。

まず、人間は自然の中で「生かされている」存在であることを再認識することです。今回の大震災は、よく「想定外」という言葉を用いて表現されています。たしかに、人間の想定をはるかに超えた自然災害であったといえますが、いつしか人間は自然災害を想定しうるものと思い上がっていたのではないでしょうか。今回の大震災によって自然の脅威を思い知らされた今こそ、自然に対する畏敬の念を再確認し、人間は自然の恵みや脅威の中で「生かされている」存在であるということを改めて意識する必要があるのです。そのことが、今後発生が予想される大地震への大きな備えとなるのです。

次に「自己を律する」意識をもつことを忘れてはなりません。大震災の直後、首都圏では生活物資を必要以上に買い求める動きがしばらく続きました。また、制限給油が行われていた際、一部の人々がガソリンスタンドの店員に物を投げたり、タンクローリーにつきまとったりしたとの報道も見られました。震災直後の不安定な状況下であったとはいえ、物質文明社会に生きることに慣れた私たちは、このように物資を求めて目先の利益にとらわれて行動してしまうことがあるのです。宗祖伝教大師は、「道心の中に衣食あり」と、道心をもって目先の利益にとらわれずに生きることの重要性を説きました。道心とは「道を修めようとする心」という意味ですが、現状では「必ず大震災から復興しようという強い気持ち」とおきかえることができるでしょう。私たち一人一人が道心をもち、自己を律して目先の利益にとらわれずに行動することが、物質的にも精神的にも豊かな社会をつくることにつながるのではないでしょうか。

〈2面につづく〉

最後に「利他」の精神をあげたいと思います。今回の大震災では、住民を津波から守るために自分の命も顧みずに行動した人々の力によって、多くの貴重な命が救われました。被災地を救うためのボランティアは全国各地から多数参集し、日々被災者支援活動に従事しています。被災者救援の義援金は各方面から集まり、総額は数千億円ともいわれます。宗祖伝教大師は「己を忘れ、他を利するは慈悲の極みなり」という言葉で、他の人のために尽くすことが最高の慈悲であると説きました。人の幸せのために生きることで自分も幸せになり、みんなが安心して暮らせる世の中をつくることができるという教えですが、現代に生きる多くの人々もその教えの大切さを無意識に感じているからこそ、大災害に遭っても人のためを思って行動できるのではないのでしょうか。「利他」の精神にあふれる行動は、今後の復興においても不可欠であるといえます。

私たちが震災後の社会で暮らしていくためには、自然の中で「生かされている」ことを再認識し、自己を律しながら「利他」の精神を発揮して、一人一人が自分たちの置かれた状況で最善を尽くすことが求められているといえます。これは、天台宗が掲げる「一隅を照らす運動」そのものに他なりません。宗祖伝教大師の説いた教えに思いをはせて、私たち一人一人が一隅を照らしていくことが、将来安心して暮らせる社会をつくりあげることにつながるのです。

被災地でのボランティア活動

「現代社会と仏教」
～想像する力～

去る四月、後輩に暖房器具を仕舞ってもらった時のこと。きちんと仕舞えたか一応確認しようと物置の戸を開けてみると、戸のすぐ裏側に置いてあったので危うく足をぶつけるところでした。また、次に使う人に便利なように注意書きをして貼ってあったのですが、折角のメモが見えない向きに置いてありました。

物置には他にも十分スペースがありましたので、位置のこと、メモのことを彼に質したところ、きょとんとした顔をして何を言われているのかすぐには分からない様子でした。

私は、ふだん好青年の彼がわざとやったのではないことに安堵したと同時に、次に誰かがそれを使おうとした時にどうなるのか全く想像をしないでいる、あるいは出来ないでいることに驚かざるを得ませんでした。

これは些細な例ですが、今の世の中、一事が万事といった調子で、もちろん若者に限ったことでもありません。駅の改札を出てすぐのところで突然立ち止まる人、平気で路地から飛び出してくる自転車…。最近、こうした思いをさせられることが多くなってきているような気がするのは私だけでしょうか。

ああしたら必ずああなるだろう、こうしたら当然こう感じるだろうということは、ふつう自分自身の経験・知識から容易に想像が付くはずです。

それが中々そういかないのは、何故でしょう。放送作家の永六輔氏はつとに、「ラジオと活字が育てた想像力をテレビがゼロにしてしまったのではないか」と述べて、日本人の想像力が急速に衰えつつあることに警鐘を鳴らしておられますが、さらに昨今のＩＴ社会においては溢れる情報があまりに厖大かつ複雑すぎて、かえって思考の自然な展開を邪魔しているのではないかとも思われます。

先日ある雑誌に、摘んだ草、伐った木を供養するために建てられた江戸時代の「草木塔」が紹介されていました。またある新聞には、農作業などで死なせてしまった虫たちを弔う「虫供養」の記事が載っていました。今でもこの習わしが残る集落の女性は、「虫も生きものだから生きたいんでしょうけど…」と話し、供養塔の前に香華を供え、般若心経を唱えて回向するとのことでした。

本来日本人には、このようにおのずと草木や虫類にまで思いを馳せる（すなわち、思い遣る、想像する）豊かで細やかな心が具わっているのです。

想像でものをいうことは悪いことのようにいわれますが、私たちはもっと遠慮なく、想像を拡げて行くべきではないでしょうか。

仏教まめ知識②『おみくじ』

初詣の際や、観光地の寺社に詣でた時におみくじを引き、吉凶を占う人がいると思います。なかには熱心に毎月、毎週、もっと言えば毎日引く人もいるかもしれません。

そもそもおみくじは、第十八代天台座主で「厄除のお大師さま」として知られた、元三大師（がんざん）さまが考案されました。お大師さまは大変霊験あらたかで如意輪観音の化身とも言われております。

ところで、元々の百番まであるおみくじの中には、大吉から凶までがそれぞれ入っていますが、そのうち凶は一体どれくらい入っていると思いますか？実は約三割が凶です。単純に確率で言えば、一人が三回引けば一回は凶、また三人が一回ずつ引けば一人は凶を引くのです。そのくらい凶は出やすいのです。

よく「凶だとよくないことがあるのですか」とか、「凶を引いたからもう一度引かせてもらえますか」などと質問されることがあります。確かに凶という文字自体はあまり良い意味ではありません。漢字の起こりから言えば、メ＝人が、凵＝穴ぼこに落ちてしまった状態が凶です。凶を引いてしまうとがっかりする人が多くいらっしゃいます。しかし凶のおみくじには、こういうことに気をつけなさいという訓示や、今はまだ時が満ちていないよという忠告、戒めなどが記されていることがあります。ですから何も落胆したり、卑屈になることはありません。

かえって大吉を引いて、単に喜んでいるだけで浮足立っていると、過信して足をすくわれることがあるかもしれません。ですから必ずしも大吉だけが良いとか、凶だけが悪いとか言うのではなく、そこに記されている言葉を素直に受け入れるようにしましょう。また凶が嫌だからと言って、吉や大吉が出るまで何度も引き直すこともお勧めできません。それではせっかくの有難い仏さまからのお示しを無下に扱ってしまうことになります。

時に厳しい言葉があるやもしれません。しかし反面、自分にとって指針となる、前向きに捉えられる言葉もあるでしょう。きっと我々の道標となるに違いありません。

東日本大震災 東京教区救援活動報告

東京教区では、大震災被災地及び被災者に対し、地震直後より様々な救援活動を展開しています。

一、緊急義援金托鉢

●教区全寺院
3月17日～随時

一、仏教青年会緊急托鉢

●天王寺
4月8日～10日

●目黒不動瀧泉寺
5月28日

●深大寺
4月
2日・3日
9日・10日
16日・23日
28日・30日
5月
1日～5日
6月7日～8日・21日
7月5日

●宮城県亘理町
4月17日～19日
7月31日～8月2日

●宮城県石巻市・気仙沼市
5月10日～11日・31日

●宮城県気仙沼市・南三陸町
7月24日～26日

一、慰霊・復興祈願法要

●天王寺
4月8日～10日

●深大寺
4月28日

●宮城県石巻市・気仙沼市
5月10日～11日

●目黒不動瀧泉寺
5月28日

●福島県いわき市
8月12日

一、災害ボランティア活動

●福島県いわき市
4月14日・5月25日

この他にも、各寺院・教区内各団体が、義援金・ボランティア活動を現在も行っています。

天台の寺めぐり㉜
品川・旧東海道周辺

養願寺

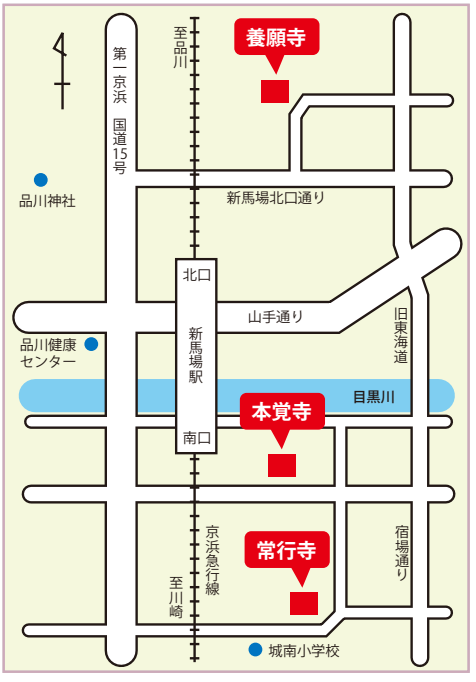
品川の地名は平安時代からあり、古来より幾多の由緒に彩られた町である。鎌倉時代から江戸時代に渡り栄え、江戸と上方を結ぶ重要な交通路であり、江戸時代には東海道の第一の宿場となった地に養願寺はある。開創は正安元年（1299）、本尊は木像の虚空蔵菩薩で年に数回大護摩供を行っている。他に阿弥陀三尊（鎌倉時代作・善光寺式阿弥陀三尊）・木造不動三尊（万治元年（1685）作）があり、共に品川区の文化財に指定されている。品川は古くから東海七福神が祀られ大勢の参拝者があり、養願寺には布袋尊者が安置され、本尊と共に多くの信仰を集めている。

養願寺本堂

本覚寺

京浜急行線、新馬場駅南口より旧東海道方面へ少し歩くと本覚寺がある。開創は元亀三年（1537）、本尊は来迎三尊阿弥陀如来である。境内奥にある石造庚申供養塔は品川区有形民俗文化財に指定されている。この庚申塔は、寛文八年（1668）に造立された高さ約1・3メートルの大型供養塔である。上部に青面金剛の立像と邪鬼、中央部に見ざる・言わざる・聞かざるの三猿、下部には造立者名と本覚寺の名が刻まれている。往時はこの塔を中心に縁日が開かれ、店が立ち並び大変賑わったと伝えられている。

庚申供養塔



常行寺

正式名称は「父母報恩院常行三昧寺」。開創は嘉祥元年（848）、慈覚大師が自身の父母のために常行三昧という修行をする目的で建立し、長保年間（999～1003）には、恵心僧都源信が住職となり、武蔵・相模国に約500ヶ寺の末寺があったと伝えられている。しかし戦乱の文安元年（1444）から大永六年（1526）まで住職不在となり、大永七年（1527）に實海僧正が旧蹟の絶えていることを嘆いて再興した。承応二年（1653）には幕府の命により、大井から品川へ寺を移したが、宝永・享保年間数回に渡り罹災し、現在の本堂は享保年間（1716～36）に再建したものと伝えられている。常行寺の隣には城南小学校があるが、南品川の住民が常行寺の本堂と大師堂を使い、第二中学区第八番城南小学校として明治七年（1874）に開校したものである。そのため常行寺は城南小学校の前身となり、今でも地域に無くてはならない寺として町を見守っている。

本尊　阿弥陀如来